

## 東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2015

### 「生きる」につなげる大学の知識 ―大切な命と心のスパイス―

第4回 10/14 (水) 13:30~15:00 報告

これも音楽? ~近・現代音楽の語法~

講師 菅野道雄 (本学教授)

於: 図書館大セミナー室

\*◆◆◆◆◆\*◆◆◆◆◆\*◆◆◆◆◆\*◆◆◆◆◆\*◆◆◆◆◆\*

第4回公開講座(受講者22名)は、本学教授で音楽科教育が専門の菅野道雄先生を講師として開催されました。今回は、「2つの大戦を経験した20世紀の音楽家たち」の「音楽とは何か?という根源的な問いかけ」から生み出された作品や音楽家を紹介されました。所謂、現代音楽と言っていいでしょう。シェーンベルク(SCHOENBERG, Arnold 1874-1951)とケージ(CAGE, John 1912-1992)を取り上げて、近・現代音楽を読み解く語法を紹介されました。

まず、古典派、ロマン派、後期ロマン派、近・現代音楽といった、音楽の歴史的展開を150年周期で変化すると大きく説明され、そうした音楽の歴史的展開の中に、現代音楽を位置づけてシェーンベルクの説明に移って行きました。

シェーンベルクは、それまでの調性を脱し無調性音楽に入り12音技法を創始したと紹介され、おそらくはシェーンベルク音楽の展開の基点となる作品として、①3つの小品 作品11(1909)から第1曲、②5つの小品 作品23(1920-23)から5. ワルツ、③「月に憑かれたピエロ」作品21(1912)から第1部 冒頭部分を、音楽と講義を交えながら説明されました。最後にシェーンベルクの戦争体験やユダヤ人としての体験から作られた④「ワルシャワの生き残り」作品46(1947)を聞きシェーンベルクを終わりました。

次にシェーンベルクに教えを受けた(2年間)ジョン・ケージの紹介に移って行きました。弟子入りした当初、シェーンベルクの「音楽を書くには和声が必要」であり「ケージの和声感覚の欠如が壁になるだろう」という言葉に、ケージは「壁に頭を打ち続けることに一生を捧げます」と答えました。この会話は、両者の音楽に対する考え方の違いを象徴しています。ケージの作品を、⑤「不確定性」(1959)、⑥4分33秒(1952)、⑦プリペアド・ピアノのための「ソナタとインターラード」(1948)から第5ソナタ・第6ソナタ、⑧「居間の音楽」(1940)と、映像と音楽と講義を交えて紹介されました。ケージは音楽を「音」に還元し、無音の中の「音」として「4分33秒」を、また映像が紹介された「居間の音楽」は身近な物による「音」を提示しました。

現代音楽という高度で難解なテーマを、できる限りわかりやすく紹介されましたが、聴講者は、新しい音楽の切り口に新鮮さを感じた方と、やはり難解だと

感じた方があったように思われます。

【講座の様子】

